

詩編 98 編 1-9 節

●「瞬きの詩人」と呼ばれた水野源三さんは、バラの花咲くこの季節に「私の胸の中には」という詩を書いておられます。

クリーム色のバラが 咲き香る清い朝です。

私の胸の中には 主のみ愛が 主のみ愛がいっぱいです。

彼の詩からは、小さく弱い自分を顧みてくださったキリストの愛が、彼の内にまるでバラのように咲き誇っていたことが伝わってきます。また、

奇しみ恵み 尊き愛を思う心よ ばらを咲かすため 雨降りそそぐ

主の御わざを感謝せよ 証せよ

とも歌っておられ、水野さんのこの詩は、今日の聖書箇所である詩編 98 編と響き合います。

●詩編 98 編は、「神の慈しみに満ちた救いの御業」に驚きと感謝をもって賛美する歌です。ここで繰り返される「驚くべき御業」「救いの御業」「恵みの御業」とは、出エジプトやバビロン捕囚からの解放など、歴史的な神の介入の出来事を想起させます。しかし、詩人がここで見つめているのは、単なる過去の記録ではなく、「今も生きて働く神の御手」です。本日注目したいのは 3 節の言葉、「イスラエルの家に対する慈しみとまことを御心に留められた」です。「慈しみ（ヘセド）」と「まこと（エメト）」は、弱く不完全な者をなおも見捨てず、赦し、顧みる神の変わらぬ愛を表しています。そしてその神の恵みは、すべての民、すべての被造物に注がれているという、普遍的な宣言が歌われています。

●またこの詩編 98 編は、「旧約のマリアの賛歌」とも呼ばれています。それは、マリアがイエスを身ごもった時にへりくだった心をもって、「こんな取るに足りない私を顧みてくださった！」と歌った賛歌と、今日の詩編が重なるからです。神の恵みは、いつの時代にも、力ある者ではなく、小さき者、弱さを知る者にこそ深く届くのです。

●明治期の児童文学者であり作家の若松賤子（わかまつ・しずこ）さんは、会津藩士の娘として生まれ、フェリス女学校を卒業し、キリスト者として文学の道を歩みました。彼女は自らを「賤しい子」と名乗り、「神の前に小さき者」であることを覚えつつ生涯を貫きました。32 歳で世を去る際には、「私の生涯は、神の恵みを最後まで心にとどめたということより他に語る何物もない」という言葉を残しました。この言葉は、信仰における謙遜と感謝の極みであり、神の恵みを心に留め続ける生き方の証しでもあります。

私たちもまた、自らの弱さや不完全さを恥じることなく、むしろそこにこそ神の慈しみとまことが注がれることを覚えたいと思います。そして、神の恵みを深く心にとどめる者として、今週も歩んでまいりましょう。